説教20210221　　ルカ4:1-13　　326 Ⅱ152 398

 「悪魔の誘惑」

キリストよお越しください、弟子たちの中に立ち復活のみ姿を顕されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

先週の水曜日は、灰の水曜日と言いまして、この日から受難節に入りました。思えば私たちのこの世での新型コロナ渦も一年が経過し、また、今年も受難節がやってきたのです。イエス様のこの40日間の荒れ野での悪魔からの試みという体験は、エジプトを脱出したイスラエルの民が、カナンの地に入れられるまで、４０年間シナイ半島の荒れ野をマナを頂きながら旅をしたこと、そしてモーセがシナイ山の上で四十日四十夜、パンも食べず、水も飲まずに、十の戒めの契約の言葉を板に書き記したこと、をイエス様が追体験をされたという事です。

　それは、私たち人間の受ける苦難を、人となられたイエス様が同じく我が身に受けて下さったという事です。ヘブライ人への手紙には、イエス様の受けた試練のことを、「事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。」と評価する箇所がありますが、このことは人間的に見てもまったくの真理で在りましょう。

　イエス様は私たち人間と同じように洗礼をうけ、それから悪魔からの誘惑という試練を受けるなどして、まことの人間として、私たちの友となって下さったのです。

今日の聖書箇所は「さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、」と始まりますが、ここでの言い回しにはちょっと注意しなければなりません。「“霊”によって引き回され、」とこの新共同訳では訳されていますが、これを読めば、なんだかイエス様が首根っこをつかまれてあちこち引っ張りまわされるという印象を与えてしまいますが、実はそんなことはなくて、イエス様はこの40日間を聖霊に満たされて、堂々と悪に対処されたことでありましょう。聖書を読むとき、こういう印象というのは、とても大事なことだと思われます。なぜならば、イエス様が体験されたことを私たちも同じように体験するようになるからです。私たちは決して試練に遭遇して、「“霊”によって引き回され、」てはならないのです。

　幸いなことに新しい聖書協会共同訳ではもとのギリシャ語に忠実に訳しなおされていますので、その訳によって朗読したいと思います。「さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川から帰られた。そして、霊によって荒れ野に導かれ、」となります。「霊によって荒れ野に導かれ、」この霊と言うのは聖霊のことをさすのでありましょう。つまりイエス様は荒れ野に導かれても、聖霊に満たされていたので少しも動じなかったという事です。

願わくわ、私たちも聖霊に満たされてそのようにありたいと祈ります。

　では、イエス様はどのように悪魔の誘惑を受け、そしてそれを退けられたのかを見ていきたいと思うのですか、その前に、私たちはもう少し聖霊というお方について知っておく必要があるように思いますので、ここで聖霊についてお語りしていきたいと思います。

言うまでもなく聖霊というのは父子聖霊の三位一体の神の三番目に呼ばれる聖霊の神の事であります。父は天の父なる神、子はイエス様、聖霊は聖霊の神でありますが、この聖霊は見えない神様のうちでも、最もイメージしづらいのではないでしょうか。その通りです。事実、聖霊なる神はどんなお方なのか測りがたいのです。そして古くから教会では聖霊なる神がどなたであるのかが論じられてきました。極論すれば、このように聖霊なる神について私たちが思い起こし論じ合う事のうちに、聖霊なる神は立ち現れるのかもしれません。

英語では聖霊のことをホーリー・スピリット、或いはザ・スピリットと申します。つまり霊というのは数あれど、まことの霊は聖なる霊ただ一つという意味で、ザ・スピリットと呼んでいるのです。英語ではホーリー・スピリットにまつわる語句が多くあって、それがちゃんと意味を持っています。例えばインスパイアという語句がありますがこれはインとスピリットが結合してできた語句です。つまり霊に満たされている、という意味です。インスパイアという日本製の車がありますが、英語を母国語とする人たちがこの車に乗ればまさに聖霊に満たされて、イエス様のお守りと励ましのうちに前進する姿を想起するのかもしれません。

聖霊というのは、元のギリシャ語ではプネウマと言いますが、このプネウマというのはもともと神の息吹、そして風の事です。ヨハネ福音書３章８節に「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」とありますが、ここに記されている風という語句、霊という語句はどちらもプネウマなのです。プネウマと言うのは、このように本来、風のようにつかみどころのない性格を持っています。私たちが必死になって、聖霊をつかもうとしても、彼は風のように私たちの間を吹きすぎていくことでしょう。私たちと聖霊、ザ・プネウマとの付き合いは、聖霊のほうから始まります。聖霊は、神の息吹です。神の吐く息によって起こされた風の事です。私たちは洗礼を受けて、その神の息吹に満たされ、その風に体を押されて、行動へと誘われます。イエス様の御心に適ったよい行いというのは、そのようにして聖霊によって成し遂げられるのです。

聖霊というのは風でありますから融通無碍に場所と時間を乗り越えてどこへでも吹いていきます。そして私たちを運んでくれます。先ほど詠われました讃美歌は、もともとグリーンスリーブスという１６世紀のイギリスの民謡でありますが、それに賛美の歌詞がつけられて、今の日本で歌われているのです。これも聖霊のなせる業でありましょう。また先週15日に永見てるよ姉の告別式で「きみは谷のユリ」と「キリストには代えられません」の２曲のてるよ姉の愛唱歌がうたわれましたが、姉妹に息づいているこの聖霊の歌声は、時と場所を超えて、今の私たちにも届けられることでしょう。

一方で、聖霊は火にもたとえられています。イエス様がヨハネからヨルダン川で洗礼を受けられた時、ヨハネは聖霊のことを火に例えました。つまり聖霊と言うのは火のような激しい性格を持っています。私たちは聖霊に満たされて、必然的に守られながらも火の中にあるような激しい試練を潜り抜けるという事です。

聖霊についてはこれくらいにしておきまして、ではイエス様の受けられた悪魔の誘惑についてみてまいりましょう。

荒れ野、といのは聖書にとって重要な場所です。そこで私たち人間は、平生の気楽さから解き放たれ、真剣になり、神に向き合うようにされるでしょう。荒れ野というのは単に地理的な風土をいうのではありません。思えば、この一年間、私たちはこの世で新型コロナ渦中という、荒れ野をさまよってきたのではないでしょうか。荒れ野には、多くの霊が自由に吹き荒れていて、私たちの背中を押すものです。荒れ野には、多くの悪い霊もあります。恐怖に陥れる霊、人を非難する霊、自分たちだけを守ろうとする霊、それらの諸霊と私たちはこの一年間実際に戦ってきたのではないでしょうか。聖書はそのような状況の中で、真理の霊と人を惑わす霊とを見分けることの大切さを説いています。ヨハネの手紙１の４章1節からです。「愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。」とみ言葉は語っています。真理の霊とは聖霊でありキリストの霊でありキリストを信じてキリストの名を呼ぶ霊の事です。私たちは今、その聖霊に満たされ、キリストの名を呼んで、救われているのです。そしてコロナ渦中にあっても救われているのです。一方、人を惑わす霊とは、反キリストの霊であり、悪霊たちであります。イエス様を誘惑した悪魔も悪霊の一種と考えてよいでしょう。

では、イエス様ご自身は、この受難節の４０日間にあって、悪魔とどのように戦わたのでしょうか。ここには３つの典型的な場面が記されています。どの場面もイエス様は、父から受けたみ言葉によって、悪魔を退けられます。一回目の御言葉は『人はパンだけで生きるものではない』という言葉ですが、これは人間年を取ってくると実感することではないでしょうか。そしてマタイ福音書の同じ場面ではこれに続けて「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と語られています。こっちのほうも又大事ですが、これは信仰がないと分からないことかもしれません。

２番目は「あなたの神である主を拝み、／ただ主に仕えよ」というみ言葉でイエス様は、悪魔を退けられました。ここでの悪魔の口上は「わたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」というものです。如何でしょうか。私たちは、特に追い詰められどうしようもなくなった状況において、このように悪魔から誘惑されれば、それについていってしまうものではないでしょうか。

３番目はちょっと複雑です。悪魔は父なる神のみ言葉をちゃんと調査して、その力を知っての上で、そのみ言葉を論拠として、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。」と言ってイエス様を唆すのです。しかしこの成り行きも、私たちの身の上に多く起こっていることではないでしょうか。私たちは、聖書の言葉を知識として数多く蓄えていたとしても、実際の信仰が試される場面で、私たちが御言葉ではなく、悪魔の唆しの言葉のほうに載せられてしまうという危険性を、イエス様は身をもって体験して下さったのです。

この３つの場面はどれをとっても、私たち人間の悪との戦いにおいて身につまされることを教えています。イエス様の霊は、悪魔の霊をものともせず、たちどころに聖霊によって、み言葉によってそれを退けられましたが、実は悪魔はここで滅ぼされたわけではありません。最後に「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。」と記されていることからわかりますように、悪魔は時が来れば又やってくるのです。

イエス様がここで手っ取り早く悪魔を滅ぼされなかった理由は何でしょうか。それは私たちが聖霊なる神とはいかなるお方なのかを求め続けることによって、聖霊なる神に満たされるという事に似ているかもしれません。

「地獄への道は善意で敷き詰められている」というヨーロッパのことわざを皆さんご存じでしょうか。わかりやすく言えば、悪は、悪い顔をして近寄ってこないという事です。悪は、むしろいい人ぶった顔をして近寄ってくるという事です。イエス様に近寄ってきた悪魔もまさにそのような偽善の仮面をかぶっていたのではないでしょうか。

私たちが良い霊と悪い霊とを見分けることはそんなに簡単なことではなく、私たちは聖霊の神に満たされ聖霊の神によらなければそれを成し遂げられないことでありましょう。私たちは悪魔の誘惑から私たちを救いだし、死をも乗り越えて、最後の日まで私たちを悪魔から守って下さる、聖霊なる神に感謝しつつ、この受難節の一日一日を過ごしてまいりたいと願います。

天にいます父なる神よ

今御前に私たち兄弟姉妹を

世を去ったものと、この世にあるものを等しく守り導く主よ、どうかあなたを信じて世を去った人たちを、あなたの身元で守って下さい。ことに永見てるよ姉を守って下さい。姉妹の歩みを照らし、かの日にはすべて者が、あなたの身元で永遠に祝されることが出来ますように。

私たちはこの世にあって、多くの悪の誘惑にさらされています。私たちは恐れと不安のうちにその誘惑に乗せられ、偽りの正しさのうちに住もうとする罪深いものです。主よどうか私たちの歩みを確かなものにし、御子イエスキリストに与えれたみ言葉によって、私たちが悔い改めて、悪を悲しみ、平和の内に歩むことが出来ますよう、聖霊の満たしをお願いいたします。

御子を復活され、常に私たちに生き生きとした希望を与えて下さる主よ、どうか、この受難節の日々を私たちがあなたからの愛にすがって生きていくことが出来ますよう、私たちに聖霊の満たしをお願いいたします。

父と聖霊と共に